



地方からのホットライン（令和7年9月）



今回は「私の人生で出会った思い出の一曲」というタイトルで原稿をお送りいただきました。演歌あり、ポップスあり、フォークあり、洋楽あり、クラシックあり。実に様々な分野の音楽を地方評議員の皆さんが「私の一曲」として紹介してくださいました。

●相良 直哉さん(宮城県仙台市在住)

本社勤務に移ってからは、勤務後に先輩、同僚と飲んで歌っての生活はなくなりましたが、愛媛支社勤務時代の思い出がいま蘇っています。支社長をはじめ3人の先輩社員がおられ、業務指導を受けた週の終わりには、その先輩たちとの楽しい会食と歌と踊りが待っていました。締めの一曲は、飯田久彦が歌った「ルイジアナ・ママ」。先輩社員がこの歌を歌いながら見事なツイストを披露してくれました。支社閉鎖時に三好進さんから頂いた「オールデイズ 75 曲 3 枚組 CD」は、よき思い出として今も大切に保管しています。

●金子 幸雄さん(山形県山形市在住)

昭和 55 年 8 月、名古屋支社へ異動と聞かされた。それまで丸 5 年間、広島支社で保育事業部の担当者として働き、特に「プレイルーム新規園」の開設に力を入れてきたからでしょうか、プレイルームの指導員の先生方が送別会を開いてくれました。その時に歌った歌が「北へ帰ろう」（作詞作曲・歌 徳久広司）でした。♪ 北へ帰ろう 思い出抱いて 北へ帰ろう 星降る夜に ♪ と歌っていたら、指導員が泣いていたのです。自分の歌う歌に女の人が涙を流してくれるなどということは、この時が初めてでした。女性の流す涙の美しさを、この時に初めて知りました。ということで、自分の人生にとっての忘れがたい一曲は、この「北へ帰ろう」です。この数日後、私は「鬼」と恐れられていた K 支社長の待つ名古屋支社へ・・・あな、恐ろしや、恐ろしや。

●丹野 智彦さん(福島県安達郡大玉村在住)

私の好きな歌は、さとう宗幸さんの「青葉城恋唄」です。確か、大学3年の夏に仙台に帰省した際、市内のあちらこちらでこの曲が流れていました。高卒後、仙台を離れていた私は、初めて聴く「宗さん」の歌声に魅了されると共に、歌詞の内容に仙台を離れた自分を重ね合わせ感動しました。それ以来、カラオケで歌う私の十八番になっています。仙台では今でも、七夕まつり（8月6日～8日）期間中は、「宗さん」の「青葉城恋唄」が七夕会場で流れているようです。

●堤 満弘さん(長野県長野市在住)

「ほほに小さな泣きぼくろ かわいい人よなぜ泣くの」で始まる、平尾昌晃作曲、「ジュンとネネ」の「愛するってこわい」が青春時代の思い出の一曲として今も心に残っています。当時 19 歳のショートカットのジュンと女の子っぽいネネのデュオ。ジュンにイメージが似ている一つ年上の女性が当時の職場である販売局にいて、その人への恋心がそのままジュンに転化し、曲とセットになって、甘く切なく懐かしい思い出の曲になっています。数年前に銀座のライブハウスの「タクト」へ二人の 50 周年記念コンサートを観に行きましたが、100 人定員の会場は満席。間近で一緒に歌ったり話したりして楽しみました。「当時恋した年上のあの人は、今頃どうしているかなあ～！」

●吉羽 文雄さん(埼玉県さいたま市在住)

歌謡曲、演歌は人並みに好きですが、私の「いち推し」は《曲》です。オーストリアの第二の国歌と言われる、ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」です。当初は、流れていれば聴く程度のことでしたが、支社勤務時代、元日のニューイヤーコンサートをテレビで見て以来ハマりました。以降、以前住んでいた札幌で開催されるニューイヤーコンサートを毎年楽しんでいます。以前は、合唱だったようですが、その後「曲」だけとなり、心に響くメロディーが日常の疲れを癒してくれます。いつかウイーンで開催されるコンサートにも行きたいものだと思います。

●影山 皓一さん(静岡県浜松市在住)

美空ひばりは、私が仙台に赴任していた36年前に亡くなりました。それまで私はひばりの真価を知らず、あまり好感を持てはいなかったのですが、亡くなってから家内の影響もあり、すぐに「CD全35巻400曲」を買い込みました。それ以来、さみしくても、つらくても、またうれしい時も、飽きることなく、ひばりの「七色の声」を聴き続けております。ひばりに癒されてきた36年と言ってもいいくらいです。数あるひばりの歌で敢えて挙げるとすれば、「越後獅子の唄」「津軽のふるさと」の2曲でしょうか。

●渡邊 洋二さん(愛知県春日井市在住)

「何気ない毎日が風のように過ぎてゆく この街で君と出会い この街で君と過ごす」という歌詞で始まる中村雅俊の『いつか街で会ったなら』が、私のベストソングです。昭和50年の中学野球部時代、2番サードとして最後の大分市大会に向けて猛練習の5月、この歌がラジオから流れてきました。喜多條忠の詞と吉田拓郎の曲が明るく軽やかで、中村雅俊の声とマッチし、小生の愛唱歌に。以来50年間、白球の思い出と共に口ずさんでいます。因みに最後の大会は、初のベスト4達成でした。

●早川 正英さん(愛知県愛知郡東郷町在住)

「いくつもの日々を乗り越え 辿り着いた今がある」は、ゆずの「栄光の架橋」のサビですが、これまで頑張ってきたことが報われるような気持ちになれる思い出の一曲です。2004年のアテネ五輪、体操男子団体、金メダルをかけた最後の演技は富田選手による鉄棒。ミスをしなれば金メダルという極限状態の中、順調に演技をすすめ、最後の「新月面宙返り」で着地へ。日本国中の国民がハラハラドキドキして見守る中、NHKの刈谷富士雄アナウンサーの発した言葉は、「渾身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ」でした。何とも見事な描写で、演技と実況の言葉がピタリと決まった一瞬でした。

●三好 進さん(愛媛県松山市在住)

高校3年生の時、自由時間に各自レコードを持ち寄って、鑑賞会を実施。鑑賞後、順位を決めることになり、1位は、F君が持参した「峠の幌馬車」(ビリーボーン楽団)で、2位が私の「コーヒールンバ」(ウーゴブランコ)でした。悔しかったけど、納得の順位でした。「峠の幌馬車」は、軽快なテンポでダンス曲としても人気、F君の実家がダンスホールを営んでいることで、さらに納得。昭和38年当時は、ドーナツ版が350円(今だと3500円~5000円くらいか?)でなかなか買えず、友達とレコードの貸し借りをして楽しんでいます。社会人になってからの給料で、念願の「峠の幌馬車」を最初買ったのは言うまでもありません。